

茶の湯文化学会会報 No.32

第32号 / 2002年3月15日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://chanoyu.hoops.ne.jp/ e-mail chanoyu@regano.ocn.ne.jp

二〇〇一年国際OICHA学術会議報告

小泊重洋

平成十三年一月五日から八日にかけて、静岡市のコンベンションアートセンター「グランシップ」で、表記の研究発表会が行われた。これは、平成八年から静岡県が主体となって計画を進めてきた「世界お茶まつり」の一環として開催されたものである。開催の趣旨は、産業から文化までの様々な分野で茶について研究している世界の学術研究者が一堂に会し、最新の研究成果を発表するとともに、互いに交流し、今後世界規模で茶についての学術研究を進展させようとするものであった。

このような国際的な茶の研究発表会は一〇年前の平成三年に同じく静岡市において開催されたが、この時は生産や効能などお茶の科学が主体で、人文科学関係は除かれた。今回は、お茶に関わるすべての学問を対象とし、「歴史・文化」「生産」「効能」「流通・消費」の四つの分科会が設けられた。参加した国や地域は、一九に及び、参加人員は同伴者を含めて五七八名であった。最終的に発表された論文数は、「歴史・文化」部門三四題、「生産」部門九二題、「効能」部門一〇〇題、「流通・消費」部門が四一題、合計二六七題が各会場で発表された。「歴史・文化」部会を中心

に会議の様子を紹介しよう。

一月五日午後、中国琵琶の演奏により始まった開会式のあと、「歴史・文化」部会では、「茶道文化の精神」と題した千宗室氏による記念講演会があった。その後、会場を移し、村井康彦座長により中国と英国からの招待講演が行われた。中国からは、陝西省・法门寺博物館の韓金科館長が招かれ、法门寺出土茶具にみる唐代茶文化と日本のかかわりについて、イギリスからはビクトリア・アルバート博物館のヒラリー・ヤング氏による、「一六六〇年から一八〇〇年のイギリスにおける茶文化について」発表が行われ、その後、参加者と熱のこもった討議が行われた。なお、韓金科氏に対しては、その研究業績に対し今回特別に設けられたパイオニア学術研究大賞が贈られた。夜は、参加者全員によるパーティーが華やかに行われた。

二日目は、午前中、「茶樹の起源」について「生産」部会とのジョイントシンポジウムが行われた。中国茶葉研究所の専門家による野生茶樹の研究成果に加え、最新の遺伝子解析により茶樹の日本への伝播経路などについても発表され、討議された。午後は二時までポスター発表の時間がとられ、計一四一題、うち「歴史

・文化」部門一二題の発表が行われた。これは所定の場所に各自用意した図表、写真などを掲げ、そこを訪れた研究者と直接討議するもので、同学の士と交流を図る格好の場となっていた。その後、昨日に引き続き口頭発表が行われ、この日は中国における喫茶の起源と発展について中国から三題日本から二題の発表が行われた。

三日目は午前中がヨーロッパの喫茶文化についてイギリス、トルコなどの歴史、さらに熊倉功夫氏からシーボルトが日本から持ち帰った一七〇年前のお茶について興味深い発表がなされた。なお、今回はオランダ・ライデン民族学博物館から特別に借り受けた二三点の現物も一般に公開され、多くの関心を集めた。午後は前日に引き続きポスター発表が行なわれた後、アジアにおける各種茶についての報告があった。台湾の研究者からは中国の辺地を踏査した緊圧茶に関する貴重な報告とともに、五〇年以上前の花巻茶が振舞われた。中村羊一郎氏からは、東アジアにおける茶を飲用、食用、食材の面から仕分けすることが述べられた。中国の沈冬梅女史による宋代の茶の作り方と喫茶についての発表は、豊富な史料を駆使し、具体的に当時の茶の作

り方、点て方、飲み方などが述べられ、日本とのかかりについても言及し興味深いものであった。夜は、フェアウエルパーティー。国際シンポジウムで最も意義深いセミナーであった。お酒の勢いを借りて、海外に知己を得る絶好の機会だからである。

最終日の八日は、午前中、茶産業に関わる建築物、煎茶の唐物、天平時代にみられる「茶」の使い方、茶の唄など広範な茶文化に関する研究発表があり、四日間にわたるシンポジウムを好評裡に終了した。

今回のシンポジウムでは、公用語は英語とされたが、「歴史・文化」部会および「消費・流通」部会では同時通訳が行われた。しかし、予算の関係から一カ国語しか対応ができず、「歴史・文化」部会では中国語を採用した。今後、茶の文化を広く海外へ発信していくために英語力は不可欠になるであろう。しかし、日本と中国を中心とした茶の文化を英語で論じるにあたり、日中とも固有名詞の英語化には自分の間、戸惑いを感じるであろう。今回も身近なところで、英名で記された出席者名簿を見て、互いに誰が出席しているのか皆目見当がつかない有様であった。中国ではKodomariから小泊（中国語では

Xiao Bo)は思い浮かばないし、Luyuを陸羽と読みとれる日本人は少ない。次回、二〇〇四年に開催する構想があるが具体化には至っていない。
*なお、今回のプロシーディングス(英文)は四分科会セット(一万円)で販売されているとのことです。関心のある方は金谷町お茶の郷博物館(静岡県金谷町金谷)小泊重洋館長までご連絡ください。

平成十三年度大会

本年度の大会を、東京のエフプラザ(主婦会館)を会場として、十一月八日に開催した。晴天に恵まれ、また没後五〇〇年を記念して村田珠光を中心に据えた企画によつたため、多くの参加者をえて、盛會裡に終えることができた。午前中は二つの通常の研究発表、午後は依頼による三つの研究発表とシンポジウムをおこなった。その概要は次の通りである。

研究発表

『茶湯一会集』における「観念」について

杉本みちる

「観念」の語は、序文と二十二項目の中で

は、「独座観念」の項目を除いては「後炭中」にてでてるのみである。しかも、「後炭中」の「風炉会には、此拝見無之、観念の子細もなし」の一文は「二期一会」「独座観念」の語と同様に草稿本にはなく清書本において出てくることは、すでに先学によって指摘されている。直弼は『茶湯一会集』において、自己の茶の湯の精神を伝えるべき適切な表現を模索し、著述し続けている。書き加えられたこの一文に、直弼は何を示そうとしたのか。

後炭の炉中拝見のところで、序の「二期一会」と「独座観念」とが呼応するように「観念」の語が出てくる。そこには、主客共囲炉裏を囲み、炭の闌けた姿に、時の移ろいを感じ一期一会の観念を思ふ風景が見られるのである。囲炉裏の炭の風体とはどのようなものか、そこに見出される精神とはどのようなものか、『茶湯一会集』の茶事の風景から、囲炉裏の炭のもつ風体とその精神の相関において、「二期一会」「独座観念」の意味を考究することを試みた。

茶懐石の位置について

加藤幾子

茶料理とは何なのかを、茶の湯との類似を

考えることでうきばりにさせたい。ここでは、茶料理は茶の湯の先人の言葉の中にどのように溶け込ませることができるのか、茶料理の茶会記の中での扱い、茶の湯のレトリックを茶料理に移し替えることが可能なのかどうかといった、三つの中で考える。

茶は古来仙薬として考えられてきた。茶を飲むのは無の行為、空を飲むのであって、西洋のドリンクとは異なる。一方茶料理はあくまで食欲という第一次欲求を充たすものにならざるべきでない。これを組み合わせなければならない

のであるから、無味を追求する、すなわち旬の材料を使い自然の中で育まれた味を生かす、引き算の味付けしかない。これこそ、無味すなわち醍醐味と言える。

茶会記においては、茶と茶料理の扱いに差がある。

利休の茶道具には、歪みがあるが、歪みはくのように、くに似たという喩えで表現でき、そこから暗喩へ移行することが可能である。それは銘に関係するが、茶料理に銘を付けることには限界があり、そのことを認識しながら、茶と茶料理を調和させる工夫をしていかなければならない。

珠光茶碗と珠光青磁

稲垣正宏

中世末期の茶会記、『山上宗二記』や『天王寺屋茶会記』などに登場する珠光茶碗と、今日博物館や美術館に所蔵されている珠光青磁は、同じものなのだろうか。室町後期から江戸初期の茶会記に記された珠光茶碗の特徴は、①「へらめ」(縦のすじ)が二十六く七本ある。②「福字」の刻印がある。③持つてみて重い。④ひしほ色(茶褐色)である。対して、珠光青磁には、①「へらめ」がなくカ



キメがある。②「福字」がない。③持つてみて特に重く感じない。④多くはモスグリーンであるが、ひしほ色のものもある。したがって、両者は一致しない。

珠光茶碗の特徴をほぼ備えたものは、堺環濠都市遺跡から出土している。生産地は浙江省龍泉窯で十六世紀中頃から後半にかけて日本に将来された。珠光青磁は、博多近郊千代の松原周辺にある箱崎遺跡群から出土している。生産地は福建省同安窯（定溪窯）。天正三年を最後に茶会記から消えた珠光茶碗が、現有珠光青磁となつて再登場した理由としては、明和三年以降、表千家の復興を図るために、川上不白を中心とした表千家関係者にとつて珠光伝来の珠光茶碗が必要となり新たに復活した、という谷晃氏の説がある。これには、十七世紀後半に行基焼をかけた花入れにしたり、十八世紀には出土品愛好者が増えて茶道具として用いるようになる、という背景があったと考えられる。

珠光筆と伝えられる絵画について

島尾 新

茶人として同様、画人としての珠光の存在は曖昧である。狩野永納は、『本朝画史』

に「珠光 不知履歴、曾工畫、或曰即是茶人珠光也、毎所畫師眞能、未知然否」と書いている。つまり、すでに十七世紀末、永納は珠光筆の絵（珠光落款ないしは印をもつ絵）を「あの茶の湯の祖・珠光の筆になる」と全面的に信じていたわけではなかった、ということがわかる。江戸時代を通してこの見方は変わらない。

その後三百年を経た現在、珠光筆とされる絵は数点伝わっている。その代表は、野村美術館蔵の「山水図」である。「珠光筆」の落款と、大徳寺風の朱文壺形印「珠光」印が捺され、一休の周辺にいたという珠光のイメージをかき立てる。内箱蓋裏墨書には「珠光和尚南都光明寺之住僧契茶爲樂、画師能阿弥学牧溪（中略）自宝徳年中（一四四九）到元文（一七三六）凡三百七十年余（後略）」とある。結論としては、「写し」であったり、「あの珠光」の絵として作られたものではない。作者は、「あの珠光」、あるいは別人の珠光の可能性もある。この絵は大徳寺系澆墨山水図の一つで、大徳寺の一休を中心とするイメージ形成のためのプロダクション・システムのようなものがあつたと想像される。

の表現である。

シンポジウム

「珠光の実存を纏って」

戸田勝久

珠光の茶の表現が問題となるとき、度々徐熙の鷺の絵についてふれられるが、『四祖伝書』のなかに利休が松屋久政に示したこの絵についての口伝が記されている。そこでは絵が問題にされているのではなく、一文字がなにか軸にカリンを使っているといった表具が問題とされている。

珠光作の茶約も問題になるが、紹鷗伝来のものがあり珠光像が紹鷗から利休へと次第にイメージが作られていくことがわかる。また時代が下るに従って美化もされていくことが珠光の肖像画の変遷からもわかる。

さて珠光の作とされる「心の文」であるが、一九三六年に発刊された創元社『茶道』巻五に「心の師の一紙」として最初に取り上げられ（この時点ではすでに写真だけか存在しなかった）、次に『茶道古典全集』に取り上げられて永島福太郎氏により初めて学問的な検討が加えられた。続いて村井康彦氏により『日本思想体系』に「心の文」として収



大徳寺の禅

泉田宗健

大徳寺の禅を語ることは、日本の臨済禅の直接的な源流を探ることになる。禅の流れは「応燈関一流の禅」と言われる。その中核をなすのが「燈」すなわち大徳寺を草創した大燈国師宗峰妙超である。大燈は大応国師南浦紹明に師事したが、大応は中国南宋の虚堂智愚の法を嗣いでいる。この虚堂の禅が日本の臨済禅の源流となる。

一休宗純は「虚堂七世孫」や「大燈五世孫」

められ解説が加えられ、さらに倉澤行洋氏により「心の文」「お尋ねのこと」について詳細な考察が加えられた。

村井康彦

「心の師の一紙」を「心の文」と変更したのは、「心の文」という言い方も早くからあつたからである。これについて珠光のものかどうか、疑問を持つ人もいるが、与えられたとされる古市播磨という人物は文芸に非常な関心を持っていたし、同じく古市播磨が連歌師猪苗代兼載から得た連歌師心敬の『心敬僧都連歌庭訓』とも雰囲気に近いものがあり、内容を疑うこともない。

倉澤行洋

「心の文」の写真については西堀一三氏に借用を願つたことがあるが、創元社『茶道』の刊行時点以降写真の存在もわからなくなっている。名称についてはあまり一般化していなかったが、すでに早くから「心の文」という呼び方があつたはずである。永島氏は「古市播磨法師宛一紙」という名称で紹介されたが、過不足のない名称ではあるが些か長いこともあり、響きなどもよいこともあつて「心の文」という名称を使っている。そこには茶の湯における心の重要性を示す意図もあつ

た。

シンポジウムの題に実存という言葉が使われているが、実在と実存は違い、実存は主体にとつてどういう意味があるのかという問いが含まれる。珠光については、資料が乏しいこともあって実在像をつくるのは難しいが、「心の文」では禅の素養の上に歌の伝統を認識しさらに能楽論の深みを摂取し茶の湯の理想の姿を示しており、珠光は実存の像として我々に影響を与え続けている。

村井康彦

わからない珠光を追求してもしかたがない。実在の像を捉えることはやはり必要である。上杉に寄寓していた宗祇の志野宗信への手紙の中に珠光の存在を示す部分があり、山科家に大口袴を注文した奈良の珠光の存在も知られている。また一休の南山城時代に奈良の珠光が参禅したことも十分に考えられる。そのようなことから珠光の存在は間違いない。

竹内順一

「心の文」の中の「和漢のさかいをまきらかす」とは、唐物を和物のように見られることを言っており、唐物の選べ方・見方の問題であろうと思う。『山上宗二記』には、珠光道具

として一八点挙げられているが、本当に珠光の好みを反映しているのかを考えてみると疑問が残る。『山上宗二記』以前の名物記を検討した矢野環氏の教示などにより判断して、珠光茶碗、抛頭巾肩衝、壊れ帷子天目が珠光の好みを反映していると考えられる。それらは、鵜目を持ったり篋目を持ったりする唐物ではあるが純粹な唐物とは見えない物である。『山上宗二記』に挙げられた一八点はあくまでも堺の茶人のフィルターを通して選ばれた物で、そのフィルターをはずして考えるべきである。

村井康彦

それは、唐物の中にひえ・かれを見出しそうだった唐物へと好みが移っていることを示しているのではないか。時には和物による唐物写しなども作られ、全体として唐物から和物へと流れていったのだろう。

戸田勝久

あとから珠光を探っているというところがあるが、核に成るものは存在したと考えるべし。

高知例会

一二月九日午後三時より高知例会としては初めての試みとして公開方式で実施した。会員九名のほか、一般から三七名の参加を得た。

茶花の生け方(茶道文献を読む)を課題とした。『珠光茶道秘伝書』、『分類草人木』、『南方録』などの文献をテキストとして利用し、この文献に記されている花入、竹一重切、竹二重切、広口、細口、釣舟などの花入に参加者が実際に花を入れ、その上で文献を読み、先人の茶花の生け方の心と形を研究した(発表者 柏井 武)。

「寄稿」

「スンコロク・ソコタイ・アユタヤとアジア」に関する国際会議に出席して

小倉 光夫

タイ国バンコックにおいて、一月二二日・二三日に「スンコロク・ソコタイ・アユタヤとアジア」の国際学術会議が、タイ国調査学術協会の「五地域調査研究プロジェクト」によって開催され、タイ国を中心にアジア五カ国から二五〇余名の関係者が参加した。

きだろう。結局人物像にしても増幅されていく、そしてイメージが成立するということもある。実在についてあまりこだわって議論する必要も無いように感じる。



村井康彦

中国の茶と言えは陸羽と盧全の名が上がる。抹茶では陸羽は取り上げるが、なぜ盧全の「通仙清風」は煎茶に取り込まれたのかという疑問を持っている。五山文学では陸羽も盧全も取り上げるが、林下では取り上げなくなる。五山詩にうたわれた茶は団茶による煎

今回のテーマの中心は「スンコロク陶磁器がアジア各国の文化の中に伝播されている状況」についての報告であった。

第一日目には、米国カリフォルニア大学のR・BROWN教授から「スンコロクとアジア」の基調講演のあと、タイ国タマサート大学元学長のC・KASESRI教授の司会でアジア五カ国からの報告があった。

・日本「茶の湯道具における宋胡録」茶の湯学会員 小倉忠夫

・香港「アジアにおけるスンコロク陶磁器の流通」

・ペトナム「ペトナムで発見されたタイ陶磁器」

・インドネシア「東南アジアにおけるスンコロク陶磁器の伝播」

ガジャマダ大学

W・NAVATI

・シンガポール「シンガポール河口地域でのスンコロク陶磁器の発掘調査」

シンガポール歴史博物館 文美玉

第二日目には、タマサート大学のM・KRAIBURK教授から「スンコロク陶磁器」の

基調講演のあと、スンコロク陶磁の過去から現在までについてタイ国の五人の研究者から報告があった。特に、近年東南アジアにおい

大会発表者募集

茶がほとんどであることからみて、五山では団茶が使われていたのではないかと。次第に五山より林下に勢力が移る、そんな転換の時期に珠光が存在した。珠光の一休への参禅も、林下であればこそ可能だったのではないか。珠光は禅とのかかわりを持った最初の人である。また、五山の中の茶については明らかではないが、盧全の事を考え直すことで、見えてくるものがあるはずである。

大会の発表者を募集します。今年度は総会と大会を纏めて六月上旬に行う予定(日時については事務局までお尋ねください)で準備を進めていますので、発表を希望される方は、四月一五日までに、八〇〇字程度の概要を添えて事務局までお申し込みください。一報告につき報告二〇分質疑応答一〇分程度です。

今年度は武野紹鴎生誕五〇〇年にあたります。紹鴎関係の発表を歓迎します。

例会

て貿易船の沈船の発見がなされ、積荷のタイ陶磁器が引揚げられ、一三〜一六世紀にタイの生産した陶磁器がアジア各国に伝播した様子が浮彫りにされた。スンコロク・ソコタイ・アユタヤ陶磁器の調査研究が各国の専門家によって熱心になされている姿があった。

開催します。
 一、研究報告 四月一日(土)
 会場 唐津市民会館中会議室
 受付 一三時から
 研究報告 一三時三〇分〜一六時三〇分
 肥前名護屋城の実像 高瀬哲郎氏
 山里丸の草庵茶室 五島昌也氏
 二、見学会(貸切バスにて)
 集合 九時JR唐津駅南口
 見学午前 名護屋城博物館・名護屋城遺跡
 昼食
 午後 唐人町の御茶屋窯跡
 中里太郎右衛門陶房
 解散 一五時頃JR唐津駅(予定)

も、元の攻略から幸運にも滅ぼされなかつた仏教国である日本とタイ国には、共通した宋文化の影響が「茶の湯」と「スンコロク陶磁器」に残されている事を指摘した。

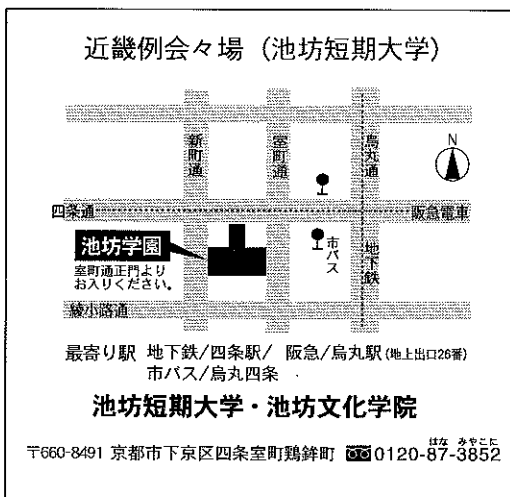
例会のご案内
 近畿例会
 次の日程で開催します。多数の会員のご参加をお待ちします。会場は池坊短期大学(京都市下京区四条室町鶏鉾町)第一会議室です。
 ○三月三〇日(土) 午後二時から
 「田能村竹田と煎茶」考 船阪 富美子氏
 伊集院兼常の建築と茶の湯 矢ヶ崎善太郎氏

研究会のお知らせ

すでに別便でお知らせしたとおり、本年度最後の行事である研究会を、四月一日・二・三日の両日にわたり佐賀県唐津市・鎮西町で

研究会のお知らせ

すでに別便でお知らせしたとおり、本年度最後の行事である研究会を、四月一日・二・三日の両日にわたり佐賀県唐津市・鎮西町で



後記

*本年度最後の会報をお届けします。世の中いろいろとあった年でしたが、年度内に最終号をお届けできてほっとしています。
 *先号の役員及び幹事氏名の内、中村利息氏は中村利則氏の、船阪富美子氏は船阪富美子氏の間違いでした。お二人には深くお詫びします。
 *なおホームページが <http://chanoyu.hoops.ne.jp> に移行しました。ご利用ください。